

## アナログアキュライザーの展開(22)

### —音源比較(22)—

#### 1. 始めに

前報(21)に引き続いて、アナログアキュライザーの効果を受けつつ、フォーマット違いの各種音源を切り替えて比較試聴していきます。

#### 2. アナログアキュライザーの適用と試聴方法

アナログアキュライザーの活用(19)からアナログアキュライザーの活用(21)までの検討結果を要約すると次のようになります。

アナログ音源再生時の適用

ステップアップトランス Stage1030 の入力端子

フォノイコ Brooklyn DAC+の出力端子

fidata 収納および TIDAL における MQA 音源のストリーミング再生時の適用

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

その他のデジタル音源再生時の適用

DA-3000 の入力端子 (Ex-Pro の出力後)

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

今回も上記のルートでリムスキー・コルサコフのシェラザードを聴いていきます。

アナログ

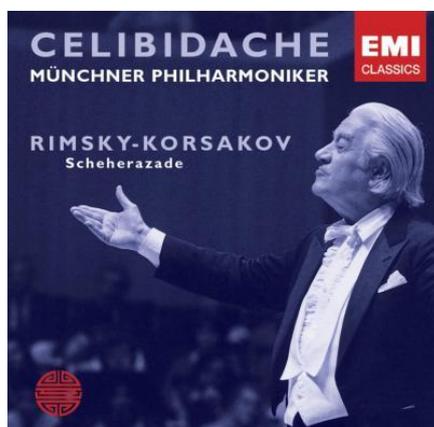
**PHILIPS 25PC-74**

キリル・コンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD

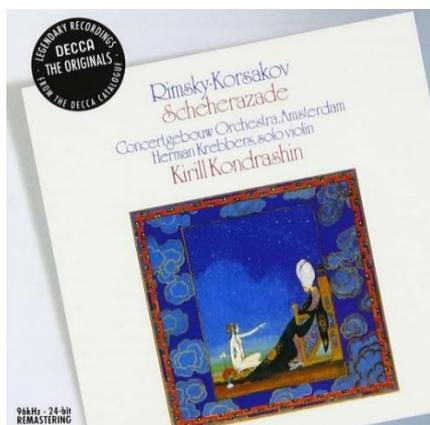
**EMI 5578532**

セルジュ・チェリビダッケ指揮ミュンヘンフィル



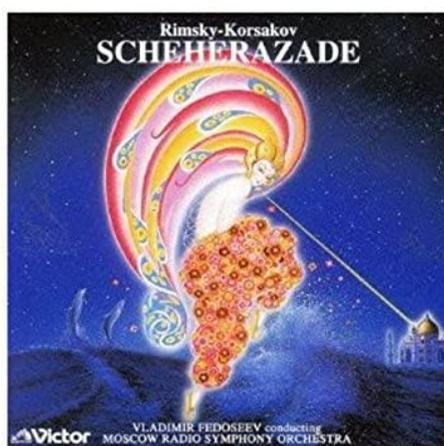
PHILIP UCCD-4418

キリル・コンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウ



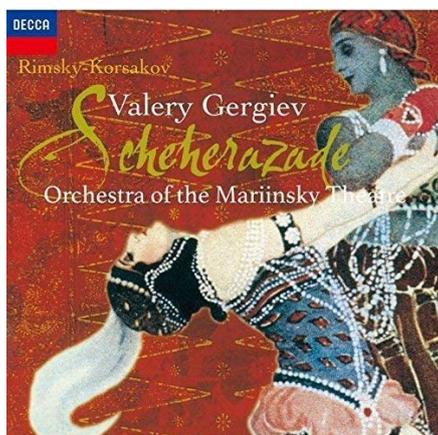
Victor VICC-75007

ウラジーミル・フェドセーエフ指揮モスクワ放送管弦楽団



PHILIP UCCP-1060

ヴァレリー・ゲルギエフ指揮キーロフ歌劇場管弦楽団



Decca UCCD-7022

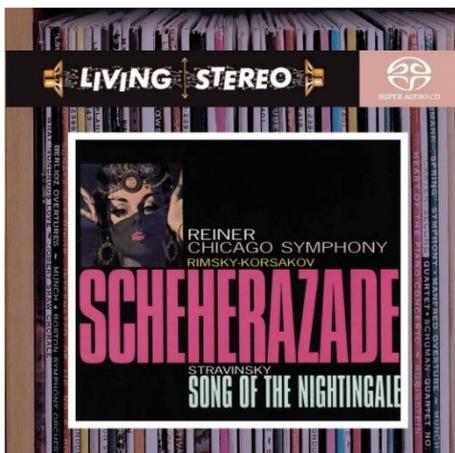
レオポルド・ストコフスキー指揮ロンドン交響楽団



SACD-CD

RCA LC00316

フリッツ・ライナー指揮シカゴシンフォニーオーケストラ



BPODCH

2019年3月5日収録

ズビン・メータ指揮ベルリンフィル



2016年10月15日収録

トウガン・ソヒエフ指揮ベルリンフィル



2006年6月18日ワルトビューネコンサート収録

ネーメ・ヤルヴィ指揮ベルリンフィル



### 3. アナログアキュライザーの試聴結果

アナログの盤は、この演奏の決定版とされているもので、抒情性豊かに歌うところから、ダイナミックに圧倒するところまで、非の打ちどころがありません。

CDのチェリビダッケ盤は、ゆっくり目のテンポで、ミュンヘンフィルを存分に歌わしていきます。各パートの音が合っているせいか、フォルテッシモでは押出しが冴えます。

コンドラシン盤は、アナログ盤と同じマスターからのCDで、アナログ盤の雰囲気の色濃く残しています。

フェドセーエフ盤は、フェドセーエフ指揮でモスクワ放送管弦楽団の後進であるチャイコフスキーシンフォニーオーケストラの生演奏で聴いています。2012年のことですので、記憶は薄らいでいますが、音量の大きさに驚いた印象があり、CDもその雰囲気が感じられます。

ゲルギエフ盤も、フェドセーエフ盤と同様の印象で、ロシアの指揮者が、ロシアのオーケストラでロシアの曲を演奏するとこのような迫力を聴かせるのかという感じがします。

ストコフスキー盤は、響きが豊かで煌びやかな印象です。

SACD/CD のライナー盤は、CD 層を聴きましたが、アメリカのオーケストラらしく、アップテンポ気味で歯切れの良い演奏です。

こうやって、6 枚の CD を一挙に聴いていきますと、音の紡ぎ方のお国柄みたいなものが、アナログアキュライザーのおかげで良く分かるようになりました。

BPODCH の指揮の演奏では、メータは椅子に座ってゆったりと、ソヒエフは軽妙に、ヤルヴィのワルトビューネコンサートでは端正にと、指揮の様子は違っていますが、ベルリンフィルは、どの演奏を聴いても安定しています。

#### 4. まとめ

リムスキー・コルサコフのシェラザードについて、アナログアキュライザーの効果を取り入れた、メディアや再生経路違いあるいは収録年代の音質や演奏の比較が容易にできるようになりました。

以上